原子力学会シニアネットワーク連絡会設立記念総会の報告

(社)日本原子力学会に「シニアネットワーク連絡会」(略称SNW)が発足した。シニアネットワークは、原子力産業界のOBの集まりである「エネルギー問題に発言する会」(林勉代表幹事)の活動の一環として行ってきた「学生とシニアの対話」活動をより広くかつ継続的に行い、さらに他のシニア活動へも発展させるために、より多くの産学官の原子力シニア、大学、学生の組織化を図ったものである。

設立記念総会は、5月22日に日本電機工業会館(東京・半蔵門)で開かれた。総会には来賓、発起人シニア、学生、マスコミなど62人が参集した。まず竹内哲夫会長が、「オイルピークと地球規模の環境問題で原子力は正にこれからが出番になり、人類の生存をかけて正念場の時代になる。50年間で功罪ともに今の原子力の社会を作ったのはわれわれの責任、これからの原子力の意義を伝え、"モッタイナイの真意"など伝えるのもシニアの責務だ。これまで多くの学生と語り、若い皆さんが将来の職場に不安を持っていることも知った。就職指導のアドバイザーも努めたい」と決意を述べた。天野治企画担当より、シニアネットワークの理念、活動方針、これまでの実績などの説明があった(詳細は近日中に原子力学会ホームページに掲載予定)。学会の学生連絡会からは7人出席し、その活動を紹介した。また昨年のシニアとの対話に参加し、今春原子力企業に就職した2人は対話での経験が大変有意義だったと述べた。

原子力学会の芹澤昭示会長からは、「この機会に多くの原子力シニアの方たちが再び学会の会員として復帰し、研究活動にも活躍していただきたい」と学会復帰を呼びかけた。

来賓の方々にもメッセージを頂いた。石井吉徳東京大学名誉教授は、「若い力、熱意と、シニアの指導力、知恵の両方が連携すれば強靭になる。原子力は純粋すぎるので自らの欠点が分からない。シニアネットワークが原子力だけではなく、他の分野にも横につながっていくことが必要だ」と今後の連携活動にも期待を寄せた。日本原子力産業協会の宅間正夫副会長は、「19世紀から20世紀かけては技術が人を引っ張ってきた。これからは一人ひとりが自らのものとして原子力を考え発信するルネサンス時代である。高い社会的使命感、倫理観を有するシニアが社会と人類と地球環境のバランスを考えて発信していくことが大事だ。今までは理性の時代であったが、これからは感性も大事である」と変化の時代の中でのシニアの役割に言及された。

電気事業連合会の桝本晃章副会長は、「シニアの方たちに、夢やビジョンを若者にエンカレッジして欲しい」として、サミュエル・ウルマンの"青春の賦"の有名な"若さとは人生のある時期のことではなく、心のあり方のことだ"で始まる詩を朗読された。

会場を提供いただいた日本電機工業会の早野敏美専務理事は、「原子力技術を維持発展させ、また学生に夢と希望を与える最も有効な施策は原子力発電所の新規建設であり、また高速増殖炉(FBR)を含めた燃料リサイクルの開発推進が必要」と強調した。

大学を代表しては、東京工業大学藤井靖彦教授が、「産業界において原子力開発に携わったシニアがその経験、情熱を若者に直接伝えるネットワークが自発的組織としてできたことは、従来の原子力関係組織では考えられないことである。市民社会が求める原子力とはまさにこのような活動から生まれるものではないだろうか」と大学側としての期待を述べた。

62名が参集した設立総会

科学ジャーナリストの中村政雄氏からは「原子力に反対する人たちは大きな声を出して元気が良く分かりやすい、皆さんも元気良く発言して欲しい」と激励をいただいた。

夜の懇親会で、経済産業省原子力政策課の柳瀬唯夫課長、文部科学省原子力計画課の中原徹課長、日本原子力文化振興財団の横手光洋専務理事、日本原子力技術協会の石川迪夫理事長からそれぞれご祝辞をいただいた。

設立記念総会は盛況のうちに終了したが、活動は始まったばかりだ。「学生とシニアの対話」は年間を通じて全国各地の大学を周回して継続していきたい。また、これからの脱石油時代におけるシニアの役割について原子力界以外の方々にも参画いただき、シンポジウムを何回か開催し、多くのシニアの方々と議論しながら、このネットワークの有意義な活動展開を図っていきたいと考えている。

◆

(SNW幹事、三菱重工業 特別顧問・金氏　顕)